

## カムサ語動詞形態論試論\*

蝦名 大助

d-ebina@kuins.ac.jp

キーワード：カムサ語 南米先住民語 動詞形態論 膠着的 融合的  
名詞抱合 語幹交替

### 要旨

カムサ語はコロンビア国プトゥマヨ県シブンドイで話される系統不明の言語である。本稿ではカムサ語の動詞の構造を明らかにし、また動詞接辞の意味を記述する。

カムサ語の動詞形態論は接頭辞付加が優勢である。動詞接頭辞には人称を表すもの、アスペクトを表すもの、モダリティに関わるもの、ボイスに関わるものなどがある。動詞は、アスペクトや主語・目的語の数に応じて複数の語幹を持つことがある。1つの動詞形において複数のアスペクト標示がありえる。また名詞抱合がみられる。

### 1. はじめに

カムサ語は、コロンビア国プトゥマヨ県シブンドイ (Sibundoy) で話される系統不明の言語である。Jamioy Muchavisoy (1999: 252) によると、話者人口は約 4,000 人で、うち 30%ほどが流暢な話者だという。この 20 年ほどで話者人口は減少していると考えられる。2019 年時点での民族人口は 7 千数百人で、うち 3 分の 1 前後がカムサ語話者であると推計される<sup>1</sup>。

カムサ語は形態論が複雑な言語として知られる (Adelaar 2004: 151)。名詞形態論はそれほどでもないが、動詞形態論が特に複雑である。先行研究で動詞形態論が扱われているものがいくつかあるが、接辞の承接関係にまで言及してある研究として主立ったものは Jamioy Muchavisoy (1999) ぐらいしかみあたらない。しかし、筆者が調査したところ、Jamioy Muchavisoy (1999) が提示する分析と筆者の分析とのあいだにはいくつかの点で重要な違いがある。本稿ではカムサ語動詞形態論について、新しい分析を提示したい。

\* 本論文のもととなる調査は、2017 年～2019 年、毎年 8 月～9 月にかけてシブンドイで行なった。また 2020 年 2 月～3 月にも調査を行なった。これらの調査は文部科学省科学研究費助成事業 (挑戦的研究 (萌芽)) 「カムサ語の動詞構造の研究」 (課題番号: 17K18498) の支援を受けた。調査協力者は San Felix 地区 (vereda) 出身の 60 代女性である。調査協力者に感謝したい。

音素は以下のとおり: i, e, a, o, u, ə, p[p~ɸ], t, k, b, d, g, ts, ch[tʃ], tʃ[tʃ~tʃe], s, sh[ʃ], ʃ[ʃ~e], j[x], ʒ[ʒ], m, n, ñ[ñ], l, r, w, y. なお ll[x] はスペイン語からの借用語のみに現れる。これまでの研究で、筆者は j の代わりに x を用いてきたが、本稿では j を用いることにする。現地の表記では [x] を表すのに j が用いられることも x が用いられることもある。x を用いたほうが実際の音声を類推しやすいという利点があるが、一方で [ʒ] を表すのに x が用いられることもあり、まぎらわしい。このようなまぎらわしさを回避するために j を用いる。

<sup>1</sup> 筆者のコンサルタントによると、話者人口は 3 千人ほどではないかということであったが、もう少し少ないと考える者もいる。

## 2. 先行研究

カムサ語の先行研究で動詞形態論を扱っているものには、Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973)、Howard (1977a, 1977b)、Jamioy Muchavisoy (1999) などがある。

Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973) は、様々な形態素の意味を示している。動詞接辞がかなり網羅的に扱われており、名詞抱合についても記述がある。テキスト資料や例文から、各接辞の承接関係についてある程度推測はできる。しかし形態論分析がほとんどなされていないため、動詞接辞の意味や用法はわかっても、全体的な動詞構造や正確な承接関係がわからない。

Howard (1977a) は動詞形態論から談話構造の関係を明らかにしようとした研究である。談話構造の理解に主眼が置かれており、動詞形態論の記述は断片的である。たとえば人称接辞としては自動詞3人称主語のものしか挙げられておらず、他の人称接辞にどのようなものがあるかは Howard の記述からは知ることができない。(なお Howard (1977b) は Howard (1977a) のスペイン語版である。)

Jamioy Muchavisoy (1999) はカムサ語の動詞の構造を扱っている。「述語の構造」というタイトルであるが、実際には名詞や形容詞は扱われておらず、動詞のみが扱われている。それぞれの形態素のおおよその承接関係がわかるという点で有用であるが、後述するように分析にいくつかの問題がある。以下では主にこの Jamioy Muchavisoy (1999) の分析と対比させながら、筆者の分析を提示する。

## 3. カムサ語の動詞構造

### 3.1. 形態分析

以下に、筆者が考えるカムサ語の動詞構造を示す。

COMP	INT/NEG	PSN	FUT	AFF	ASP	IMPF	RET	TRANS	PAST	REFL	STEM	NUM
<i>t-</i>	<i>ke-</i>		<i>cha-</i>	<i>n-</i>	<i>j-</i>	<i>ts-</i>	<i>t-</i>	<i>is-</i>	<i>an-</i>	<i>en-</i>		
HS				NEG	DUR							
<i>i-</i>				<i>at-</i>	<i>d-</i>							

図 1. カムサ語の動詞構造

図中各行の上段は各形態素の意味（グロス）を、下段は各形態素の代表的な音形を示している。人称接頭辞 (PSN) と語幹 (STEM)、数 (NUM) については該当する形態素が複数個存在するため、具体的な音形は示していない。数に関係する形態素は接尾辞（随意的）であり、それ以外の接辞はすべて接頭辞である。

各行の下段には、上段同列の形態素と同じ位置に現れる形態素を示している。たとえば、伝聞 (HS) を表す *i-* は、完成相 (COMP) を表す *t-* と範列関係にある。

次に語幹内部の構造を示す。

STEM-INITIAL VOWEL	INCORPORATION	STEM
--------------------	---------------	------

図 2. 動詞語幹の構造

名詞の抱合形 (incorporated form) は、語幹頭に現れる母音と残りの語幹のあいだに挿入される。このような母音を本稿では語幹頭母音 (siv = stem-initial vowel) と呼ぶ。

上で述べたように、図 1 中の各接辞は代表的な音形を示してある。多くの接辞は異形態を持つ。異形態には自由変異と、形態音韻論的な異形態とがある。形態音韻論についてはまだ分析があまり進んでいないため、本稿で詳しく述べることはしない。

複数接尾辞が現れる位置には、名詞化接尾辞や場所格接尾辞が現れうる。名詞化接尾辞や場所格接尾辞が付いた動詞形は定動詞とはみなせないため、本稿では詳しく述べない。

一方、Jamioy Muchavisoy (1999: 257) は以下の表を提示している。

表 1. Jamioy Muchavisoy (1999) の動詞形態素の分類<sup>2</sup>

アスペクト	参加者		エピステミック・モダリティ	時制	結合価の増減	動詞語基	数
	被行為者	行為者					
完結相 <i>t</i>	<i>ɣ</i>	1 <i>sə</i>	確言	発話時に	<i>o</i>	(例が挙げられているため、省略)	SG <i>∅</i>
	<i>k</i>	2 <i>ko</i>	<i>n</i>	近い <i>ts</i>	<i>e</i>		DU <i>t</i>
	<i>∅</i>	3 <i>e</i>	非確言	発話時か	<i>a</i>		PL <i>ng</i>
未完結相 <i>n, V</i>		1DU <i>sə</i>	<i>j</i>	ら遠い <i>j</i>			
		2DU <i>ɣo</i>		起こりえ			
		3DU <i>bo</i>		る <i>ch</i>			
		1PL <i>sə</i>					
		2PL <i>ɣmo</i>					
		3PL <i>mo</i>					

表 1 は、一見するとそれぞれの形態素の位置を示しているようにみえるし、Jamioy Muchavisoy (1999: 257) も「原則としてこの順序に並ぶ」としている。しかし実際には必ずしもそうではない。たとえば Jamioy Muchavisoy の分析ではアスペクトに関わる形態素として完結相 (perfective) の *t* と、未完結相 (imperfective) の *n* または母音が挙げられている。表ではこれらはすべて語幹からもっとも遠い位置に現れる接頭辞であるようにみえる。実際、*t* (筆者の分析では完成相、completive) は語幹からもっとも遠い位置に現れる接頭辞なのであるが、Jamioy Muchavisoy

<sup>2</sup> 一部の形態素の表記は筆者のものに変えてある。また表中の日本語は筆者が訳したものである。

が言うところの未完結相の形態素はこの *t-* と範列関係にあるわけではない。別箇所、これら未完結相の形態素は「語基」(base verbal) に後接する接尾辞であると説明されている。同様に、時制を表すとされている *ts, j, ch*<sup>3</sup> も同じ位置に現れる形態素ではない。この表は、現れる位置におおよそ従って各形態素を配置したものだが、実際には意味による分類がなされている。

別の問題点は、いくつかの形式について過度な分析がなされていることである。たとえば、主語 (Jamioy Muchavisoy の用語では「行為者」) を表す接頭辞と目的語 (Jamioy Muchavisoy の用語では「被行為者」) を表す接頭辞は異なる位置に現れ、それぞれ別な形式であると分析されている。表中に「シンプル」と示されていることから (目的語人称接頭辞が単独で現れるケースが仮にあったとしても命令形以外では考えられないが)、主語人称接頭辞と目的語人称接頭辞どちらかしか現れない場合の音形を示していると考えられる。別箇所 (p.260)、主語/目的語どちらも単数の場合についてのみ、組み合わせの形式が示されているが、形態音韻的に説明できない組み合わせがある。たとえば、1 人称単数主語/2 人称単数目的語については、*k-sa-* の組み合わせが *kbo-* として実現するとされているが、場当たりの形態音韻規則を設けなければこのような音形を導き出すことはできない。後でみるように、カムサ語では主語/目的語の人称接頭辞は共時的には融合しているとみたほうがよい。

また、Jamioy Muchavisoy のいう未完結アスペクト接尾辞 *-n/-V* は、実際には動詞語幹の一部であって接尾辞とは分析できない (5.2.1. で示すように、アスペクトによって語幹が交替すると本稿では分析する)。語幹の一部であるものが異なる形態素 (接頭辞) と分析される例は他にもみられる。このような過度な分析は、歴史的には別形態素であった可能性の反映かもしれないが、共時的には妥当ではない。

また、筆者とは解釈が異なる形態素がいくつかあるが、個別の問題については 4 節で検討する。

## 4. 各接辞の分析

### 4.1. *t-* 「完成相」

*t*<sub>1</sub><sup>-4</sup> は、行為がすでに終わったことを表す (completive aspect)。

#### (1) tonjwapté<sup>5</sup>

*t*<sub>1</sub>-o-n-j-wapte

COMP-3SG-AFF-ASP-雨が降る.PERF

「雨が降った。」

<sup>3</sup> Jamioy Muchavisoy はこれらの接頭辞がそれぞれ時制を表すと分析しているが、筆者は *ts-* や *j-* はアスペクトを表わすと分析する。また *ch* は未来を表す *cha-* の異形態だが、Jamioy Muchavisoy は *ch* を代表的な音形ととらえているようである。

<sup>4</sup> 同じ音形の別の接頭辞があるので、*t*<sub>1</sub>- とし示す。

<sup>5</sup> 本稿では語においてもっとも強い強勢 (stress) が置かれる位置にアクセント記号を付すことにする。しかしアクセントについてはまだわからないことが多い。筆者の観察では句末が高くなりやすいようだ。一方で語末以外に明らかに強勢が置かれる例もみられる。アクセントとイントネーション両者によって音調が決まるという可能性も考えられる。

$t_1$ -がない場合その行為は終わっていない。現在または過去における進行中の行為や状態、あるいは未来の行為や状態を表す。

## (2) entsaptén

e-n-ts-aptén

3SG-AFF-IMPF-雨が降る.IMPF

「雨が降っている。」

(2) は現在進行中の出来事を表している。訳文の意味を表すためには、 $t_1$ - は出られない。

## (3) a. tkonjás

 $t_1$ -ko-n-j-as

COMP-2SG-AFF-ASP-食べる.PERF

「君は食べた。」

## b. sənjás

ø-sə-n-j-as

COMP-1SG-AFF-ASP-食べる.PERF

「私は食べた。」

## (4) a. kontsesá

ko-n-ts-esa

2SG-AFF-IMPF-食べる.IMPF

「君は食べている。」

## b. səntsesá

sə-n-ts-esa

1SG-AFF-IMPF-食べる.IMPF

「私は食べている」

(3) では行為が終わっているが (4) では終わっていない。主語が 2 人称単数の場合、終わった行為 (3a) の場合に  $t_1$ - が現れているが進行中の行為 (4a) では現れていない<sup>6</sup>。しかし 1 人称単数主語の場合にはどちらも  $t_1$ - が現れていない。独立した接頭辞として  $t_1$ - をたてるとすれ

<sup>6</sup> 話者によっては (3a) のような場合でも  $t_1$ - が現れないことがあるようだ。比較的若い世代の言語特徴であるかもしれない。

ば、(3b) では異形態としてゼロ形式をたてる必要がある。このため、蝦名 (2014) では  $t_1-$  を独立した接頭辞として扱わず、共時的には人称接頭辞と融合していると分析した。

しかしその後の調査で、 $t_1-$  と人称接頭辞とのあいだに、否定文や疑問文であられる  $ke-$  が現れることが明らかになった。 $ke-$  については 4.3. で述べる。そのため、 $t_1-$  は独立した接頭辞でなければならない。よって上の例文では 1 人称単数主語  $sə-$  の前に  $t_1-$  の異形態としてゼロ形式があると分析する。

#### 4.2. $i-$ 「伝聞」

$i-$  の機能はまだ詳しくわかっていない。物語に現れやすいようである。

- (5)     $imojwatsjín3$                  $jwabiám$   
           $i-mo-j-watsjin3$              $j-wabia-m$   
          HS-3PL-ASP-学ぶ.PERF    ASP-織る-INF  
          「(皆) 織ることを学んだ。」

(5) は物語文中の一節である。Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 72) も、「物語や伝説中の出来事であることを意味する」と述べている。ここでは  $i-$  は「伝聞」の意味を表わすと考えておく。

#### 4.3. $ke-$ 「疑問／否定」

$ke-$  は否定文や疑問文で現れる。否定や疑問を表す場合であっても義務的ではないようだ。

- (6)     $kekabwátəm$              $kem$      $betíy$   
           $ke-ko-abwatəm$          $kem$      $bet-iy$   
          INT-2SG-知る            これ    木-CL  
          「この木は知っていますか？」

- (7)     $ndoñ$          $ketsatabwátəm$   
           $ndoñ$          $ke-sə-at-abwatəm$   
          NEG        NEG-1SG-NEG-知る  
          「知らない。」

$t_1-ke-$  の連続は  $che-$  となる。

- (8) chekjás  
 t<sub>1</sub>-ke-ko-j-as  
 COMP-INT-2SG-ASP-食べる.PERF  
 「もう食べた？」

このように、*t<sub>1</sub>-* と人称接頭辞とのあいだに *ke-* が現れることから、*t<sub>1</sub>-* は独立した接頭辞であることがわかる。

#### 4.4. 人称接頭辞

##### 4.4.1. パラダイム

人称接頭辞には環境によってさまざまな異形態があるが、ここでは人称接頭辞の前に他の接頭辞が現れず、人称接頭辞が *n-* 「確言」の前に現れる場合の形式を示す。

表 2. 主語人称接頭辞（自動詞）

人称と数	形式
1SG	sə-
1EXCL.DU	sbo-
1EXCL.PL	sbo-
1INCL.DU	bo-
1INCL.PL	mo-
2SG	ko-
2DU	ʒo-
2PL	ʒmo-
3SG	e-
3DU	bo-
3PL	mo-

表 3. 人称接頭辞（他動詞）

目的語 主語	1SG	1EXCL.DU 1EXCL.PL	1INCL.DU 1INCL.PL	2SG/2DU 2PL	3SG	3DU/3PL
1SG				kobo-	s-	s-
1EXCL.DU				kobo-	sbo-	sbo-
1EXCL.PL				kobo-	sbo-	sbo-
1INCL.DU					bo-	bo-
1INCL.PL					mo-	mo-
2SG	ʂko-	ʂko-			ko-	ko-
2DU	ʂmo-	ʂmo-			ʂmo-	ʂmo-
2PL	ʂmo-	ʂmo-			ʂmo-	ʂmo-
3SG	ʂo-	ʂo-	bo-	komo-	bo-	e-/bo-
3DU	ʂo-/ʂmo-	ʂo-	bo-	komo-	bo-	e-/bo-
3PL	ʂo-/ʂmo-	ʂo-	bo-	komo-	mo-	e-/mo-

他動詞活用の、特に3人称が主語の場合については揺れがみられる。たとえば目的語が3人称複数の場合に、自動詞と同じ活用が許容される。なお Jamioy Muchavisoy (1999: 257) の分析では、1人称双数形および複数形において除外形 (exclusive) と包括形 (inclusive) の区別を認めておらず、さらに1人称で単数・双数・複数の区別が失われているようだが、Jamioy Muchavisoy の示した体系は比較的若い世代の言語特徴を反映していると思われる<sup>7</sup>。

#### 4.4.2. 人称接頭辞の解釈

人称接頭辞は、主語と目的語の人称と数によって異なる。すでに述べたように、Jamioy Muchavisoy (1999) は、主語人称接頭辞と目的語人称接頭辞を独立したものとして分析している。しかし、表から明らかなように、主語人称接頭辞と目的語人称接頭辞とは共時的には融合しているとみるべきである。

たとえば、Jamioy Muchavisoy は1人称単数目的語の接頭辞として *ʂ-* を認めている。たしかに、*ʂ-ko-* (2SG>1SG) は *ʂko-* として、*ʂ-e-* は (2SG>3SG) は *ʂo-* として実現するから、これらの実現形は接頭辞の組み合わせで形態音韻論的に説明できる。しかし 2DU>1SG は *ʂ-ʂo-* であるから、実現形として *ʂʂo-* や *ʂo-* といった音形が期待されるが実際には *ʂmo-* である。これは 2PL>1SG と同じ形であるので、これを説明するためには場当たりのな形態音韻規則をたてなければならなくなる。

2人称目的語についても一見すると *ko-* をたてられそうに思えるかもしれない。しかし、*ko-* をたてると、以下のような不具合が生じてしまう。他動詞において主語が1人称の場合、その数にかかわらず実現形はすべて *kobo-* である。*kobo-* の *ko-* の部分を2人称目的語の接頭辞と

<sup>7</sup> 筆者の調査でも、ある30代の話者では除外形と包括形の区別が失われていた。



した場合、*bo-* は 1 人称主語の接頭辞ということになる。しかし、1 人称の自動詞活用において、*bo-* は主語が 1 人称双数包括形の場合のみ用いられる。1 人称単数、1 人称除外形では人称接頭辞の形が異なり、他動詞の場合の分析と一致しなくなる。

同様に他動詞活用で目的語が 2 人称、主語が 3 人称の場合、主語の数にかかわらず *komo-* という形が現れる。自動詞活用において、3 人称単数主語と双数主語ではそれぞれ *e-*、*bo-* が用いられるため、やはり他動詞の場合の分析と一致しなくなる。*ko-* を独立の形態素とした場合、場当たりの形態音韻規則が必要となる。

他動詞活用において 3 人称が目的語の場合、多くは自動詞活用と同じであり、3 人称目的語としてゼロ形式をたてる、あるいは何もたてないとうまく分析できるようにみえる。実際、*Jamioy Muchavisoy* もゼロ形式を立てている。しかし、自動詞の場合 3 人称単数主語が *e-* なのに対し、3SG>3SG は *bo-* である。*ø-e-* が *bo-* として実現することは説明できないであろう。

さらに、2DU,2PL>3 の実現形は *smo-* であるが、自動詞の場合 2 人称双数主語は *so-*、2 人称複数主語は *smo-* である。3 人称目的語の接頭辞を *ø-* とした場合、2PL>3 は *ø-smo->smo-* となりうまく説明できるが、2DU>3 は *ø-so->smo-* となってしまう。主語が 3 人称の場合に 2 人称双数主語と 2 人称複数主語が合流することになるが、形態音韻規則では説明できない。

*Juajibioy Chindoy and Wheeler* (1973: 74) は、「1 人称が目的語の場合、ふつうは *g-* が、2 人称が目的語の場合、ふつうは *k-* が、3 人称が目的語の場合、主語と目的語の組み合わせを標示する接頭辞が 1 つだけ現れる」としている。3 人称目的語の場合に融合形を認めているが、1 人称と 2 人称については「ふつう」ではない場合の言及がない。

主語と目的語に独立した形態素をたてると場当たりの形態音韻規則を多くたてざるをえなくなる。それは言語実態を反映しているとはいえ、融合形をたてるほうがよい。

#### 4.4.3. 命令

命令を表わす接頭辞は人称接頭辞と同じ位置に現れる。

- (9) mábo  
m-abo  
IMP-来る  
「来い。」

1 人称を目的語とする命令接頭辞は *sm-* である。

- (10) smín3  
sm-in3  
IMP>1-見る.PERF  
「私を見ろ。」

(9)(10) をみると、*ɟ-* を独立した1人称目的語接頭辞と分析したくなるかもしれない。しかし、4.4.2. で例証したように、他動詞活用の人称接頭辞のパラダイムにおいて主語人稱接頭辞と目的語人稱接頭辞は共時的には融合しているとみるべきである。命令形の場合のみ *ɟ-* を独立した1人称目的語接頭辞と分析するよりも、人稱標示パラダイム全体との一貫性を重んじて、命令形の場合でも1人称目的語接頭辞と命令接頭辞は融合しているとみたほうがよい。なお3人称が目的語の場合、自動詞に現れるものと同じ命令接頭辞が用いられる。

#### 4.5. *cha-* 「未来」

*cha-* は未来の行為を表す。

- (11)    *cha*            *ečanjinɔ*  
          *cha*            *e-cha-n-j-inɔ*  
          彼(女)        3SG-FUT-AFF-ASP-見る.PERF  
          「彼(女)は見るだろう。」

#### 4.6. *n-* 「確言」

*n-* は確言 (affirmative) を表す。また、直接情報 (direct information) を表すこともある。動詞が肯定形で *n-* がない場合、間接情報 (indirect information)、すなわち話者がその行為を目撃 (witness) していないことを表す。

- (12)    a.    *cha*            *tonjenangmé*  
          *cha*            *t<sub>1</sub>-o-n-j-enangme*  
          彼(女)        COMP-3SG-AFF-ASP-働く.PERF  
          「彼(女)は働いた。」
- b.    *cha*            *tojenangmé*  
          *cha*            *t<sub>1</sub>-o-j-enangme*  
          彼(女)        COMP-3SG-ASP-働く.PERF  
          「彼(女)は働いた。」

(12a) はふつう、話者が出来事を目撃した場合に、(12b) は目撃していない場合に用いられる。

未来の行為の場合、*n-* がある場合は実現可能性が高いと話者が思っていることを、ない場合にはそうではないことを表すようだ。

- (13) cha echanjín3  
 cha e-cha-n-j-in3  
 彼(女) 3SG-FUT-AFF-ASP-見る.PERF  
 「彼(女) は見るだろう。」

#### 4.7. *at-* 「否定」

*at-* は否定文に現れる。否定文や疑問文に現れる *ke-* との機能の違いはよくわからない。

- (14) cha ndoñ keochatowén  
 cha ndoñ ke-o-cha-at-owen  
 彼(女) NEG NEG-3SG-FUT-NEG-聞く.PERF  
 「彼(女) は聞かないだろう。」

#### 4.8. *j-*

- (15) tonjwapté  
 t<sub>1</sub>-o-n-j-wapte  
 COMP-3SG-AFF-ASP-雨が降る.PERF  
 「雨が降った。」

(15) は「雨が降った」という意味を表している。動詞語幹は「雨が降る」の完結語幹である。

- (16) \*tonjwapté  
 t<sub>1</sub>-o-n-wapte  
 COMP-3SG-AFF-雨が降る.PERF

*j-* の機能はよくわからない。動詞全体のアスペクトが完結相であって、アスペクトに関わる接頭辞である *ts-* や *t<sub>2</sub>-*、*d-* (いずれも後述) が現れないとき、*j-* は義務的に現れる。(16) はいずれの接頭辞も現れていないため非文法的である。また、継続相 (durative) を表わす *d-* とは共起しない。以上の点から、*j-* は何らかのアスペクトに関わる接頭辞であると考えられる。そして *d-* と共起しないことから、未完結相というよりも完結相、あるいは完結相に類するアスペクトを表わしていると思われるが、一方で未完結相を表わす *ts-* と共起することがある。詳しいことは不明である。よって本稿では単に ASP (aspect) というグロスだけを付しておくことにする。



て、筆者はまだ十分に分析できていない。*ts-* の意味についてはさらなる検討が必要である。一方で、*ts-* と同じ位置に現れる接頭辞に *d-* がある。*d-* は継続相 (durative) を表す。同じ位置に現れる接頭辞がアスペクト的な意味を表すことから、本稿では *ts-* の本来的な意味を「未完結相」と考えておくことにする。

Jamioy Muchavisoy (1999) は *j-* と *ts-* および *cha-* (Jamioy Muchavisoy の *ch*) をすべて時制マーカーとし、*j-* は「発話時から遠い」、すなわち過去と未来、*ts-* は「発話時に近い」、すなわち現在、そして *cha-* は「起こりえる」事態を表すと分析している。しかし次のような反例がある。

(20) echanjín3  
e-cha-n-j-in3  
3SG-FUT-AFF-ASP-見る.PERF  
「彼(女)は見るだろう。」

(21) echantson3áy<sup>8</sup>  
e-cha-n-ts-on3ay  
3SG-FUT-AFF-IMPF-見る.IMPF  
「彼は(将来) 見ているだろう。」

日本語訳がまぎらわしいが、(21) は「今現在見ているだろう」、という推測ではなく、「将来のある時点で見ているだろう」という未来の状態を表わす。*j-* は発話時から遠く *ts-* は近いという解釈では (20)(21) の意味の差をうまく説明できない。どちらも同程度に発話時から遠い(未来) からである。

また、*ts-* は過去の継続中の行為を表わすのにも用いることができる。

(22) entsanon3áy  
e-n-ts-an-on3ay  
3SG-AFF-IMPF-PAST-見る.IMPF  
「彼(女)は見ていた。」

(22) から *ts-* が発話時に近い時制を表すとはいえないだろう。Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 72) は *ts-* を「進行相」としている。本稿での分析はこれに近い。

#### 4.10.2 種類の *j-*?

*n-, j-, ts-* がすべて共起することはない。*n-j-, n-ts-, j-ts-* という連続は可能だが、*n-j-ts-* はみら

<sup>8</sup> 「見る」には2つの未完結語幹がある。*-on3ay* は過去や未来の事態に用いられるようである。

れない。

- (23) tonjwapté  
t<sub>1</sub>-o-n-j-wapte  
COMP-3SG-AFF-ASP-雨が降る.PERF  
「雨が降った。」(話者が目撃した)

- (24) entsaptén  
e-n-ts-aptén  
3SG-AFF-IMPF-雨が降る.IMPF  
「雨が降っている。」(話者が目撃した)

- (25) ejtsaptén  
e-j-ts-aptén  
3SG-ASP-IMPF-雨が降る.IMPF  
「雨が降っているようだ。」(話者は目撃していない)

(23)(24) では *n-* が直接情報を表している。(25) は *n-* がないため、直接情報ではない。*n-* の代わりに *j-* が現れているように見える。このような例を説明するために、Jamioy Muchavisoy (1999) は2種類の *j-* をたてている。すなわち、(23) の *j-* は「時制」マーカで(本稿では「アスペクト」マーカ)、(25) の *j-* は「非確言」のマーカとされる。Jamioy Muchavisoy の示した表1は意味による分類であったが、形態論としては以下のようなスロットを考えることになるだろう。

モダリティ      時制

<i>n-</i>	<i>j-</i>
<i>j-</i>	<i>ts-</i>

しかしこの分析には問題がある。*n-* も *j-* も現れないことがあるからである。

- (26) a. echantsongzáy  
e-cha-n-ts-onzay  
3SG-FUT-AFF-IMPF-見る.IMPF  
「彼(女)は(将来)見ているだろう。」

- b. echsonzáy  
 e-cha-ts-onzay  
 3SG-FUT-IMPF-見る.IMPF  
 「彼（女）は（将来）見ているだろう。」

(26a) は、「彼が見ているであろう」ことを話者が確言しているが、(26b) はそうではない。従って、確言と非確言（あるいは直接情報と間接情報）はあくまで *n-* の有無によって表わされると考えられる。Jamioy Muchavisoy (1999: 262) が主張するように *j-* が非確言を表わすのであれば、(26b) で *j-* が現れなければならない。なお (25) で *j-* が現れている理由はよくわからない。

#### 4.11. *d-* 「継続相」

*d-* は継続相 (durative) を表わす。*d-* は *ts-* と共起しない。また、常に *n-* 「確言」を伴って現れるようである。

- (27) a. endonzá  
 e-n-d-onza  
 3SG-AFF-DUR-見る.IMPF  
 「彼（女）は見ている（た）。」

- b. entsonzá  
 e-n-ts-onza  
 3SG-AFF-IMPF-見る.IMPF  
 「彼（女）は見ている。」

(27a) では継続相を表す *d-* が、(27b) では未完結相を表す *ts-* が現れている。継続相と未完結相の意味の違いは、(27a) と (27b) とでははっきり感じられない。ただし (27a) は現在継続中の行為も過去の継続中の行為も表せるが、(27b) はあくまで現在進行中の行為を表わすようである。なぜこのような差が出るのか、よくわからない。

次のような例文でははっきりとした差が出る。

- (28) a. chə batá bondəbómən kanʒ wapch  
 chə batá bo-n-d-abomən kanʒ wapch  
 それ 女性 3>3-AFF-DUR-持つ 一 兄／弟  
 「その女性には兄／弟が一人いる。」

- b. \*chə batá bontsebómən kanʒ wapch

chə batá bo-n-**ts**-abomən kanʒ wapch  
 それ 女性 3>3-AFF-IMPF-持つ 一 兄／弟

「兄弟がいる」という恒常的な事態を表すのに (28b) のように未完結相の *ts-* を用いることはできない。(28a) のように継続相の *d-* を用いなければならない。

#### 4.12. *t₂-* 「元に戻る」

*t₂-* は元に戻る行為を表す。本稿では RET(returnative) というグロスをあてた。

- (29) chantatám bəʒaʒá  
 ø-cha-n-*t₂*-atam bəʒa-ʒa  
 1SG-FUT-AFF-RET-閉める.PERF 戸-CL  
 「私は戸を閉めます。」

閉めた戸は元の位置に戻るなので、*t₂-* が用いられるようだ。

- (30) a. tontochútəj  
 t₁-o-n-*t₂*-ochútəjo  
 COMP-3SG-AFF-RET-着る.PERF  
 「彼(女)は(自分の服を)着た。」
- b. tonjochútəj  
 t₁-o-n-*j*-ochutəjo  
 COMP-3SG-AFF-ASP-着る.PERF  
 「彼(女)は(自分のではない服を)着た。」

「着る」の場合、*t₂-* を用いると「自分の服を着た」ということになり、そうでないと他人の服を着たということになるようだ。

*t₂-* があるとき、アスペクト接頭辞 *j-, ts-, d-* は現れなくともよい。(30a) (30b) のようなミニマルペアがあること、また (30a) (30b) からそれぞれ *t₂-, j-* をとると非文となることから、*t₂-* のふるまいは *j-, ts-, d-* に似ているといえる。よって *t₂-* はアスペクト接頭辞の一種だと考えられる。

#### 4.13. *is-*

*is-* の意味ははっきりしないが移動に関係する意味を表すことがある。本稿ではさしあたって TRANS(translocative) というグロスをあてた。



- (31) *chanjisatám*  
 ø-cha-n-j-is-atam  
 1SG-FUT-AFF-ASP-TRANS-閉める.PERF  
 「私は戸を閉めていきます。」

「再び」という意味を表すこともある。

- (32) *chanjisabóy*  
 ø-cha-n-j-is-aboy  
 1SG-FUT-AFF-ASP-TRANS-来る.FUT  
 「また来ます。」

*t<sub>2</sub>-* と意味が似ているようだが、違いがある。

- (33) *chantabóy*  
 ø-cha-n-t<sub>2</sub>-aboy  
 1SG-FUT-AFF-RET-来る.PERF  
 「(自分の家に) 来ます。」

(32) は他人の家に来る場合に、(33) は自分の家に来る場合に用いられるという。

#### 4.14. *an-* 「過去」

*an-* は過去を表す。*an-* がなくてもすでに完結した事態を表すことができるので、*an-* の有無による詳しい違いはよくわからない。

- (34) *tonjanoşáchin*  
 t<sub>1</sub>-o-n-j-an-oşáchin  
 COMP-3SG-AFF-ASP-PAST-泣く.PERF  
 「彼女は泣いた。」

#### 4.15. *en-* 「再帰」

*en-* は再帰を表す。



- (39) intʂáng            tmojokedá            tmojashjangók  
 intʂa-ənga        t<sub>1</sub>-mo-j-okeda        t<sub>1</sub>-mo-j-ashjango-ok  
 人々-PL            COMP-3PL-ASP-過ごす        COMP-3PL-ASP-着く.PERF-LOC  
 「人々は着いたところで一夜を過ごした。」

-ok は場所格の一種である<sup>10</sup>。

これらの接尾辞が付いた形は、すべて定動詞ではなく、主節の主動詞として機能することができない。よって本稿ではこれ以上詳しくは述べない。

## 5. 動詞語幹と抱合

### 5.1. 抱合

カムサ語では名詞が動詞に抱合されることがある。本稿では形態論的特徴について述べる。抱合される名詞は動詞語幹の最初の母音の直後に挿入される。

- (40) ʂonjabetʂətsetʂén  
 ø-ʂo-n-j-a-**betʂə**-tsetʂen  
 COMP-3>1-AFF-ASP-SIV-**頭**-痛める.PERF  
 「私は頭が痛かった。」(lit. 「私を頭痛した。」)

(40) では -atsetʂen が動詞語幹「痛い」であり、-betʂə-「頭」は語幹頭の母音 *a* の直後に挿入され、他の接頭辞がその外側に付いている。1 節でも述べたように、このような母音を「語幹頭母音 (stem-initial vowel)」と呼ぶ。

語幹は母音一つで始まる場合と、「w+母音」で始まる場合がある。「w+母音」も語幹頭母音と呼ぶことにする。

- (41) ʂonjwajastsetʂén  
 ø-ʂo-n-j-wa-jas-tsetʂen  
 COMP-3>1-AFF-ASP-SIV-**腹**-痛める.PERF  
 「私は腹が痛かった。」(lit. 「私を腹痛した。」)

「痛い」を表す動詞には、痛い部位によって -atsetʂen「(頭や目などが)痛い」(完結語幹)、watsetʂen「(腹や足などが)痛い」(完結語幹)がある。

抱合される名詞は、a) 非抱合形と同じ名詞語根形 b) 語根形の一部または語根形に似た音形 c) 語根形に似ていない音形の場合がある。「頭」の自立形は *betʂa-ʂ* であり、語根に類別詞 -*ʂ* が付いている。(40) で抱合形は自立形の語根と似た形である。一方で、「腹」の自立形は *wapsbi-*

<sup>10</sup> -ok は場所に関する類別詞である可能性もあるが、この点についてはまだ分析が進んでいない。

ya であるが、(41) からわかるように抱合形は *-jas-* であり、自立形とは似ていない。

- (42)    lanchəshá                    entsashbwatsəbóná  
          lanchə-sha                  e-n-ts-a-**shbwa**-tsəbóna  
          船-CL                        3SG-AFF-IMPf-SIV-水 (辺) -浮く .IMPf  
          「船が水に浮いている。」

(42) では *-shbwa-* 「水 (辺)」が抱合されている。対応する自立形は *shbwa* であり、ここでは語根形がそのまま抱合されている。*shbwa* は類別詞をとらない名詞であるので、語根形=自立形である。

## 5.2. 語幹交替

動詞語彙素 (lexeme) は、アスペクトや、主語・目的語の数などに応じて異なる語幹を持つことがある。本稿では、このようにアスペクトや主語・目的語の数などに応じて異なる語幹が用いられることを「語幹交替」と呼ぶ。ここではどのような場合に異なる語幹を持つことがあるかについてみていく。

### 5.2.1. アスペクト

もっとも一般的なものは、アスペクトに応じて2つの語幹を持つことである。

- (43)    a.    tonjowén  
          t<sub>1</sub>-o-n-j-**owen**  
          COMP-3SG-AFF-ASP-聞く .PERF  
          「彼 (女) は聞いた。」
- b.    e-n-ts-owenán  
          e-n-ts-**owenan**  
          3SG-AFF-IMPf-聞く .IMPf  
          「彼 (女) は聞いている。」

このような語幹交替をどう考え、個々の語幹をどう呼ぶべきかまだよくわからないところもあるが、さしあたって本稿では (43a) のようなものを「完結語幹」、(43b) のような場合を「未完結語幹」と呼ぶことにする。

3つのアスペクト語幹を持つ動詞もある。たとえば「見る」の完結語幹は *-ing* だが、未完結語幹には *-onzá* と *-onzay* という2つの形がある。後者は未来形と過去形に現れる。

1つしかアスペクト語幹を持たない動詞もある。たとえば「持つ」は1つしか語幹を持たな

い。アスペク的な意味としては、「持つ」の語幹は「未完結」を表す。

### 5.2.2. 未完結相接尾辞という分析について

Jamioy Muchavisoy (1999: 258) は、1つの動詞語彙素に対して複数のアスペクト語幹をたてるのではなく、語基とは別に未完結相の接尾辞をたてている。たとえば「君は食べている」という意味を表わす動詞形は、以下のように分析されている。

ko-n-ts-e-s-a-ø  
 参与者-モダリティ-時制-結合価-語基-未完結-数<sup>11</sup>  
 2-確言-発話時に近い-項関係-食べる-未完結-単数  
 「君は食べている。」

筆者の分析は次のとおりである。

(44) kontsesá  
 ko-n-ts-esa  
 2SG-AFF-IMP-食べる.IMPF  
 「君は食べている。」

ここで、語末の *-a* を未完結アスペクト接尾辞と分析するのは無理があるように思われる。1つには、*-a* を独立した接尾辞と分析すると、*-n* や *-na* などの異形態を仮定しなければならなくなる。実際、Jamioy Muchavisoy はそのように分析しているのだが、異形態の出現条件が音韻的に予測できそうもない。この語幹の場合にはこの異形態、というように語彙ごとに指定しなければいけなくなる。

また、完結語幹のほうが未完結語幹よりも音形が長い動詞がある。

(45) a. tonjomaná  
 t<sub>1</sub>-o-n-j-omana  
 COMP-3SG-AFF-ASP-眠る.PERF  
 「彼(女)は眠った。」

b. entsemá  
 e-n-ts-ema  
 3SG-AFF-IMP-眠る.IMPF  
 「彼(女)は眠っている。」

<sup>11</sup> グロスの日本語訳は筆者による。

(45a) で語幹 (あるいは語基) *-oma* に *-na* が付いていると分析した場合、*-na* が未完結相を表わしているとは考えられない。*-na* が接尾辞だとすれば、(45a) は (45b) の語幹に *-na* が付いているように見える。仮にそうだとすると、(45a) で *-na* は完結相を表しているように見える。

さらに問題となるのが次のようなペアである。

- (46) a. *tonjwabém*  
*t<sub>1</sub>-o-n-j-wabem*  
 COMP-3SG-AFF-ASP-書く.PERF  
 「彼 (女) は書いた。」
- b. *entsabiamná*  
*e-n-ts-abiamna*  
 3SG-AFF-IMPF-書く.IMPF  
 「彼 (女) は書いている。」

「書く」の完結語幹は *-wabem*、未完結語幹は *-abiamna* である。仮に *-na* を未完結相の接尾辞と分析したとしても、残った形は *-abiam* となり、完結語幹とは異なる。同様に完結語幹から未完結語幹を「派生」できない例として「隠れる」がある。「隠れる」の完結語幹は *-ojitan*、未完結語幹は *-ejitamen* である。さらには、先にみたように動詞によって 2 つの未完結語幹を持つこともある。こういった例からみて、アスペクト中立的な語幹 (あるいは語基) を 1 つたて、そこに未完結相接尾辞を付加して未完結語幹を派生する、という分析は妥当ではない。

歴史的には、いくつかの場合については独立した接尾辞が存在した可能性が考えられるかもしれないが、共時的にはそのように分析することはできない。

### 5.2.3. 単数語幹と複数語幹

主語や目的語の単複に応じて異なる語幹を持つこともある。ここではまず、主語の単複に応じて語幹が異なる動詞をみる。このような動詞として、自動詞で移動を表わすものがみつまっている。

- (47) a. *tontotábém*  
*t<sub>1</sub>-o-n-t<sub>2</sub>-otábem*  
 COMP-3SG-AFF-RET-座る.PERF.SG  
 「彼 (女) は座った。」

- b. **tmontotəbiám**  
 t<sub>1</sub>-mo-n-t<sub>2</sub>-**otəbiam**  
 COMP-3PL-AFF-RET-座る.PERF.PL  
 「彼らは座った。」

「座る」は主語の単複に応じて *-otəbem/-otəbiam* という 2 つの完結語幹を持つ。人称接頭辞や数の接尾辞では双数と複数の区別があるが、動詞語幹では双数と複数の区別はない。

- (48) a. **tojamashóngo**  
 t<sub>1</sub>-o-j-**amashəngo**  
 COMP-3SG-ASP-入る.PERF.SG  
 「彼（女）は入った。」

- b. **tmojamashəjən**  
 t<sub>1</sub>-mo-j-**amashəjən**  
 COMP-3PL-ASP-入る.PERF.PL  
 「彼らは入った。」

「入る」は主語の単複に応じて *-amashəngo/-amashəjən* という 2 つの完結語幹を持つ。目的語の単複に応じて異なる語幹を持つ動詞もある。

- |                                  |                   |             |
|----------------------------------|-------------------|-------------|
| (49) a. <b>sənjwakmé</b>         | <b>kanʒ</b>       | <b>bako</b> |
| <b>ə-sə-n-j-wakme</b>            | <b>kanʒ</b>       | <b>bako</b> |
| COMP-1SG-AFF-ASP-追う.PERF.SG(OBJ) | 一                 | 男           |
| 「私はある男を追った。」                     |                   |             |
|                                  |                   |             |
| b. <b>sənjokáme</b>              | <b>intʂánga</b>   |             |
| <b>ə-sə-n-j-okame</b>            | <b>intʂa-ənga</b> |             |
| COMP-1SG-AFF-ASP-追う.PERF.PL(OBJ) | 人々                |             |
| 「私は人々を追った。」                      |                   |             |

「追う」は目的語の単複に応じて *-wakme/-okame* という 2 つの完結語幹を持つ。すべての動詞が単数語幹や複数語幹を持つわけではなく、持たない動詞のほうが多い。

#### 5.2.4. 否定命令語幹

ほとんどの動詞は極性や法（命令か否か）によって異なる語幹を持つことはない。しかし否

定命令で独自の語幹を持つ動詞がある。

- (50)    *ndoñ*        *matinzán*  
           *ndoñ*        *m-at-inzan*  
           NEG        IMP-NEG-見る.NEG.IMP  
           「見るな。」

「見る」の完結語幹は *-inz* であり、肯定命令は *matinz*「見ろ」である。否定命令では *ndoñ matinz* が期待されるが、実際には *ndoñ matinzán* である。すなわち否定命令で独自の語幹を持つ。ただし「見る」のように否定命令で独自の語幹を持つ動詞はきわめて少ない。

### 5.3. 語幹交替と似た現象

自動詞と他動詞の音形が似ていることがある。たとえば、「閉まる」(自動詞)の完結語幹は *-atam* だが、「閉める」(他動詞)の完結語幹は *-atam* である。ここでは、語幹頭母音だけが異なっている。しかし、自他対応がすべて語幹頭母音によって示されるとは限らない。「乾く」の完結語幹は *-aboj* だが、「乾かす」の完結語幹は *-abojo* である。語幹頭母音はどちらも *a* だが、他動詞のほうが語幹の音形が長い。

また、目的語の性質の違いによって、語幹の音形が少しだけ異なることもある。

- (51)    a.    *tonjwabwamé*  
           *t<sub>1</sub>-o-n-j-wabwame*  
           COMP-3SG-AFF-ASP-買う.PERF  
           「彼(女)は(食べ物、家などを)買った。」
- b.    *tonjabwamé*  
           *t<sub>1</sub>-o-n-j-abwame*  
           COMP-3SG-AFF-ASP-買う.PERF  
           「彼(女)は(衣服、車などを)買った。」

*-wabwame* と *-abwame* はどちらも「買う」を表わす完結語幹であるが、買う対象が異なる。*-wabwame* は食べ物や家などを、*-abwame* は衣服や車などを買ったことを表わす。語幹頭母音だけが異なり、残りの語幹部分の音形は同じである。

このような自他のペアや、目的語の性質の違いによるペアは、5.2. で見た語幹交替とは異なり、それぞれ異なる語彙素であると考えられる。



#### 5.4. 語幹頭母音の形態的解釈

Jamioy Muchavisoy (1999) は語幹頭母音を独立した形態素として分析し、「その機能は様々で、今のところあまり明らかではないが、1つの機能として動詞の他動性を増やしたり減らしたりする」(p.263) と述べている。しかし筆者は、語幹頭母音を共時的に独立した形態素と分析することはできないと考える。どのような場合にどのような音形が現れるのか、予測ができないためである。

まず、自他対応について考えてみよう。Jamioy Muchavisoy (1999: 263) が指摘するとおり、語幹頭母音の違いは、自他の区別に関わることもある。上で見た、*-atam* 「閉まる」(自動詞) と *-atam* 「閉める」(他動詞) のペアでは、*o/a* という語幹頭母音のペアになっている。一方、「育つ」(自動詞) の完結語幹は *-oboche* だが、「育てる」(他動詞) の完結語幹は *-aboche* であり、*o/a* という語幹頭母音のペアである。自動詞と他動詞で、語幹頭母音がどのような組み合わせになるかは予測できない。

さらに、自他対応がすべて語幹頭母音によって示されるとは限らない。上で見たように、「乾く」の完結語幹は *-aboj* だが、「乾かす」の完結語幹は *-aboj* である。語幹頭母音はどちらも *a* だが、他動詞のほうが語幹の音形が長い。自他対応が必ずしも語幹頭母音によって表し分けられるわけではない。

目的語の性質の違いに応じて語幹頭母音が交替しているようにみえる例もある。

- (52) a. *tonjwabwamé*  
       *t<sub>1</sub>-o-n-j-wabwame*  
       COMP-3SG-AFF-ASP-買う.PERF  
       「彼(女)は(食べ物、家などを)買った。」
- b. *tonjabwamé*  
       *t<sub>1</sub>-o-n-j-abwame*  
       COMP-3SG-AFF-ASP-買う.PERF  
       「彼(女)は(衣服、車などを)買った。」

ここでは目的語の性質の違いと、語幹頭母音 *wa/a* のペアが対応しているように見える。目的語の性質の違いに語幹頭母音の違いが対応しているように見える事例では、語幹頭母音のペアは *wala* であることが多い。しかし、目的語がどのようなものであれば語幹頭母音が *wa* で現れるか、あるいは *a* で現れるか、ということは予測できない。このような語幹のペアはほかに、*-wabomən* 「持つ」(譲渡可能物の所有) と *-abomən* 「持つ」(非譲渡可能物の所有)、*-was* (主食を食べる、完結語幹) と *-as* (主食以外を食べる、完結語幹) などがある。「買う」における目的語の性質の違い、「持つ」における譲渡可能/不可能、「食べる」における目的語の性質の違いには、何ら意味的な共通性がなく、語幹頭母音の音形によって意味を予測することはできな

い。さらに「食べる」について付け加えるならば、仮に語幹頭母音を独立した形態素（接頭辞）とすると、語幹（あるいは語根）が *-s* だけになってしまい、短すぎる。また、語幹頭母音自体を接頭辞と分析するのではなく、語幹頭母音の交替を超分節的形態素とみなしたとしても、どのような意味が交替によって表わし分けられるかは予測できないし、それぞれの動詞に語幹頭母音「交替」があるかどうかも予測できない。

なお、5.1. で見たように、*-atsetſen/-watsetſen* は「痛い」を表わす語幹だが、痛みを示す部位が主語で現れる。*-atsetſen* は頭や目などが痛い場合に、*-watsetſen* は腹や足などが痛い場合に用いられる。つまり、語幹頭母音の違いが主語の性質の違いに対応していることもある。

*wala* 以外のペアもある。*-atbana/-otbana* は「拾い集める」の完結語幹である。*-atbana* は石や卵を拾い集めることを、*-otbana* はそれ以外のものを拾い集めることを表すという。表される意味だけでなく、語幹頭母音の音形も予測できない、ということになる。

以上見てきたことから、語幹頭母音を独立した形態素（接頭辞）とは分析できない。共時的にはあくまで語幹の一部であると考えられる。しかし、語幹頭母音と語幹の残りの部分のあいだに抱合形が割って入ることからみて、歴史的には語幹頭母音は動詞語幹（あるいは動詞語根）とは独立した接頭辞であったと考えられる。

なお、目的語の単複によって語幹頭母音が交替しているようにみえる例もある。

(53)	<i>cha</i>	<i>tbojín3</i>	<i>kan3</i>	<i>boya</i>	<i>basá</i>
	<i>cha</i>	<i>t<sub>1</sub>-bo-j-in3</i>	<i>kan3</i>	<i>boya</i>	<i>basa</i>
	彼（女）	COMP-3>3-ASP-見る.PERF.SG(OBJ)	—	男	子供
	「彼（女）は男の子を見た。」				
(54)	<i>cha</i>	<i>tonján3</i>	<i>bətská</i>	<i>intſáng</i>	
	<i>cha</i>	<i>t<sub>1</sub>-o-n-j-an3</i>	<i>bətská</i>	<i>intſá-ənga</i>	
	彼（女）	COMP-3SG-AFF-ASP-見る.PERF.PL(OBJ)	たくさん	人-PL	
	「彼（女）はたくさんの人々を見た。」				

*-in3/-an3* は「見る」の完結語幹であるが、*-in3* は目的語が単数の場合に、*-an3* は複数の場合に用いられる。一見すると、目的語の単複に応じて語幹頭母音 *ila* が交替しているようにみえる<sup>12</sup>。

語幹交替の特別な場合として、語幹頭母音交替を認めることができるであろうか。それはできないと考えられる。なぜなら、このような「交替」は語彙的に決まっているからである。他の動詞でも *ila* 交替によって目的語の単複が示されるとは限らない。そもそも目的語の単複に

<sup>12</sup> なお、(53)(54) は「見る」という一つの語彙素がアスペクトに応じて異なる語幹を持つ例である。「買う」「持つ」「食べる」「痛い」といったペアは、それぞれ一つの語彙素が2つの語幹を持つのではなく、異なる語彙素と考えられる。

応じて語幹が交替しない動詞語彙素のほうが圧倒的に多い。語幹頭母音交替以外の手段によって目的語の単複の区別を表す動詞もある。

## 5.5. 動詞語幹についてのまとめ

これまで動詞語幹についてみてきたことをまとめると、次のようなことがいえる。

- a) カムサ語では、動詞語幹の交替によって、アスペクトの違いや、主語や目的語の単複の区別が表わされることがある。ごくまれな例として、否定命令に独自の語幹を持つ動詞もある。
- b) 語幹交替では、語幹頭母音だけが違っていることもあるが、そうではないこともある。
- c) 語幹交替に似た現象として、自他対応や、主語や目的語の性質の違いによって異なる語幹を持つ動詞のペアがある。しかしこれは同じ動詞語彙素の語幹交替ではない。(歴史的に関係がある) 別の語彙と考えられる。
- d) 語幹頭母音は独立した接頭辞ではなく、共時的にはあくまで語幹の一部であると考えられる。まず、音形と意味・機能を対応させることができない。個々の音形が個々の形態素に対応すると考えるのではなく、母音交替自体を超分節の形態素とみなしたとしても、どのような意味が交替によって表わし分けられるかが予測できない。それぞれの動詞に語幹頭母音「交替」があるかどうかも予測できない。
- e) ただし、抱合形が語幹頭母音の直後に挿入されることからみて、歴史的にはこれらの母音は接頭辞であったのではないだろうか。

## 6. まとめと課題

### 6.1. まとめ

本稿ではカムサ語の動詞形態論について述べた。以下の点を明らかにした。

- a) カムサ語の動詞形態論は圧倒的に接頭辞付加が優勢である。
- b) 語形成(語幹形成と屈折)は接辞付加、抱合、語幹交替によってなされる。
- c) 動詞形態論はおおむね膠着的な性質を示すといえるが、一部融合的(fusional)な性質を示す。すなわち、語幹交替や、人称接頭辞である。
- d) 語幹交替には様々な音形や機能がある。
- e) 個々の形態素の配列を明らかにした。

動詞の語幹交替は、過去の膠着的な形態論の痕跡ではないかと考えられる。すなわち、未完結アスペクトを表す接尾辞があった可能性が考えられる。また、自他のペアで語幹の音形が似ていることがあり、その際に語幹頭母音だけが異なることがあることから、項の増減に関する接頭辞があった可能性が考えられる。また、これと同じ接頭辞であったかどうかは不明だが、目的語の性質の違いに関する接頭辞もあったかもしれない。しかし共時的にはこれらは語幹

の一部になってしまっており、独立した接辞とは分析できない。

## 6.2. 課題

本稿では明らかにできなかったいくつかの課題について以下で触れる。

### 6.2.1. 屈折と派生

定動詞において、語幹以外に義務的なのは人称接頭辞のみである。

#### (55) boboyjwá

bo-oboijwa

1DU.INCL-踊る

「(私たち (DU.INCL) は) 踊ろう。」

どの接辞を屈折接辞とみてどの接辞を派生接辞とみるべきかはそれほど明確でない。

定動詞は、人称接頭辞を必ず伴う。このことから、人称接頭辞は屈折形式とみてよいと思われる。また、人称接頭辞よりも語幹から遠い位置に現れる接頭辞も屈折形式とみてよいであろう。しかし、人称接頭辞よりも語幹に近い位置に現れる接頭辞のうち、どこまでを屈折形式とみなせるか、現時点ではわからない。

### 6.2.2. 複合動詞

複合動詞のようにみえるいくつかの例がある。

#### (56) tonjabosəsnán

t<sub>1</sub>-o-n-j-abo-asəsnan

COMP-3SG-AFF-ASP-来る.PERF-寒い.PERF

「寒くなってきた。」

(56) は *-abo* 「来る」と *-asəsnan* 「寒い」の2つの動詞語幹が結びついた複合動詞であると考えられる。本稿では複合動詞は扱わなかった。*-abo* 以外にも複合動詞を形成できる語幹があるかもしれない。

接頭辞同士や、接頭辞と語幹形との共起関係について、またどの組み合わせの場合にどのようなアスペクトの意味になるのかについて、まだ完全にはわかっていない。また、本稿では形態音韻論に触れなかった。形態音韻規則はまだ完全には明らかになっていない。形態音韻規則を明らかにしていく際に、本稿では同定できなかった接頭辞が同定される、という可能性もないとはいえない。

## 略号一覧

>: 左項が主語、右項が目的語

1: 1 人称

2: 2 人称

3: 3 人称

AFF: 確言 (affirmative)

ASP: アスペクト (aspect)

CL: 類別詞 (classifier)

COMP: 完成相 (completive)

DU: 双数 (dual)

DUR: 継続相 (durative)

EXCL: 除外形 (exclusive)

FUT: 未来 (future)

HS: 伝聞 (hearsay)

IMP: 命令 (imperative)

IMPF: 未完結相 (imperfective)

INCL: 包括形 (inclusive)

INF: 不定詞語尾 (infinitive)

INT: 疑問 (interrogative)

LOC: 所格 (locative)

NEG: 否定辞 (negator)

NMLZ: 名詞化 (nominalization)

NUM: 数 (number)

OBJ: 目的語 (object)

PAST: 過去

PERF: 完結相 (perfective)

PL: 複数 (plural)

PSN: 人称 (person)

REFL: 再帰 (reflexive)

RET: 元の位置に戻る (returnative)

SG: 単数 (singular)

SIV: 語幹頭母音 (stem-initial vowel)

STEM: 語幹 (stem)

TRANS: 移動 (translocative)

## 参考文献

Adelaar, Willem F. H., with the collaboration of Pieter Muysken (2004) *The Languages of the Andes*. Cambridge: Cambridge University Press.

蝦名大助 (2014) 「カムサ語における人称と数の標示の概要」神戸夙川学院大学観光文化学部紀要第5号: 80-87.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56-2: 251-299.

Howard, Linda (1977a) Certain Features of Verb Inflection as Related to Paragraph Types. in Robert Longacre (ed.) *Discourse Grammar: Studies in Indigenous Languages of Colombia, Panama, and Ecuador* Part 2: 273-296. Dallas: Summer Institute of Linguistics and the University of Texas.

Howard, Linda (1977b) Esquema de los tipos de parrafo en camsa. in *Estudios en Camsa y Catio*: 1-67. Lomalinda: Instituto Linguistico de Verano/Ministerio de Gobierno.

Jamioy Muchavisoy, José Narciso (1999) La lengua kamëntsa: estructuras predicativas. *Lenguas Aborígenes de Colombia*, Memorias 6: 231-284. Bogotá: Universidad de los Andes - CCELA.

Juajibioy Chindoy, Alberto and Alvaro Wheeler (1973) *Bosquejo etnolingüístico del grupo kamsá de Sibundoy, Putumayo, Colombia*. Bogotá: Instituto Lingüístico de Verano.

# An Outline of Kamsá Verb Morphology

Daisuke EBINA

d-ebina@kuins.ac.jp

**Keywords:** Kamsá, South American Indigenous languages, verb morphology, agglutinative, fusional, noun incorporation, stem alternation

## Abstract

Kamsá is a language isolate spoken in the town of Sibundoy, Putumayo, Colombia. In this paper, the structure of the verb morphology is sketched. Also, the semantics of each affix is described. Kamsá verb morphology is predominantly prefixing. Verb prefixes are: person markers, aspect markers, a modality marker, and a voice marker. A verb lexeme may have several stems according to aspect, and/or number of subject or object. There may be multiple aspect markings on a single verb. Noun incorporation is also observed.

(えびな・だいすけ 関西国際大学)